山口大学教育学部研究論叢　第69巻　229頁～233頁　2020年1月

変声期におけるジェンダーに関する一試論

高橋　雅子・沖林　洋平

Research on Gender Issues Concerning Changing Voice

TAKAHASHI Masako, OKIBAYASHI Yohei

（Received September 27, 2019）

はじめに

筆者らは、これまでアメリカの変声期研究カンビアータ・コンセプトCambiata Conceptを紹介し、我が国の小学校高学年から中学校の変声期男子に適用して一定の成果を挙げてきた（「変声期男子が快適に歌える合唱指導法と教材開発に関する研究」）。変声期の研究を進めることによって、変声期には「歌わせない」指導と「可能な声域で歌わせる」指導があること、アメリカも日本も「歌わせない」から「歌わせる」指導に移行して現在は「歌わせる」指導が主流であることが明らかになった。また、変声期の指導においては心理的な配慮が必要とされ、変声期男子が「第二次性徴との関わり」「音声生理学的な理解」「自らの変声期の段階（状態）の正しい理解と見通し」を持つことが重要と結論付けた。

本研究は、ジェンダー研究の実証的アプローチに対する留意点をまとめた上で、音楽や声、合唱や変声期に関するジェンダー研究を概観し、変声期における心理的な配慮についてジェンダーの視点から捉え直すための示唆を得ることを目的とする。

1．ジェンダー研究の実証的アプローチに対する留意点

児童生徒に限らず、ジェンダー・アイデンティティに関して実証的アプローチをとる場合、通常の実証的研究に加えてジェンダー・アイデンティティを踏まえた研究を行う研究手法を選択する必要がある。

佐々木・尾崎（2007）によると、ジェンダー・アイデンティティには２つの代表的な定義があるとされる。１つめは、“自分が所属している性別について知っているという感覚のこと。すなわち‘私は男性である’もしくは‘私は女性である’という認識のこと（Stoller, 1964）”という定義であり、もう１つが“男性あるいは女性、あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性（Money, 1965 東優子訳 2000）”という定義である。

ジェンダー・アイデンティティに関しては、日本精神神経学会の性同一性障害に関する特別委員会の提言（性同一性障害に関する委員会，1997；2006）として、次のように述べられている。すなわち、「性の転換の希望は単なる好き嫌いの問題ではなく、生物学的性（sex）と性の自己認知（gender）の不一致からくる障害であり、ある意味では人間存在の本質に関わる課題でもある。従って、選ばれた医療グループにおいて、学問的倫理に裏付けられた綿密にして、慎重な検討の上で選択された治療であれば、それは正当なものであり、『故なく』行われる単なる医療操作ではないとみなされる。……個人の生活の質（QOL）を高めるための医療と考えられる」というものである。石井（2010）は、日本精神神経学会のジェンダー・アイデンティティに関する提言における重要な点を、以下の４点にまとめている。１つめは、ジェンダーアイデンティは二分法的なものではなく多様なものであるということである。２つめは、治療法は、ジェンダー・アイデンティティによってのみ決まるものではないということである。３つめは、当事者たちのジェンダー・アイデンティティは一貫性をもつことが前提となっていることである。４つめは、治療法の選択は、当事者によってなされることが望ましいとされている点である。この石井（2010）の要約は、ジェンダー・アイデンティティに関する実証的アプローチを考えるにあたって示唆的であると考えられる。

ジェンダー・アイデンティティの研究の難しさは、ジェンダー・アイデンティティは当事者の主観的なアイデンティティに基づくものであるという性質であることに基づいている。このような、個人のアイデンティティが多様であり、かつ類型化が困難である点が、ジェンダー・アイデンティティの実証的研究を困難にしていると考えられる。また、近年のいわゆるLGBTを取り巻く言説を踏まえると、調査的アプローチの実施にあたっては、各研究機関の倫理委員会の審査を経るなどの過程が

求められるだろう。そのような状況を踏まえた上で、児童期や青年期におけるジェンダー・アイデンティティに関する違和感と心的な健康状態の関連について、浜田ら（2017）は、自身の性的な不一致感と人間関係意識に関連性を見出している。

以上をまとめると、音楽教育におけるジェンダー・アイデンティティとその教育的介入に関する効果の検証への要請は、今後高まっていくことが予測される。

2．音楽におけるジェンダー研究

ジェンダーについて、吉光（2007）はオニールO'Neillによる「社会化の過程を通して学習されてきた社会的特性や特徴を暗に意味する（p.333）」という定義を紹介している。一方、井上（1997）は、「フェミニズムが従来の闘争的側面を緩和し、議論の場により多くの人々の参入を促すことに成功した最も重要な概念（p.22）」とジェンダーについてフェミニズムの観点から言及している。その目的は、「性差を生物学的決定論から社会的・文化的構築物へと認識転換すること」、すなわち「男と女の主観的アイデンティティは社会によって生み出される」と主張した（p.22）。今田（2013）は、ジェンダーという用語がカタカナ語で定着した理由について、「社会科学では『社会的文化的性差』などとされるが、どうも長くて収まりが悪い。故に、日本でこの概念は、カタカナによりそのまま写し取られた。広義性と狭義性とが混在した複雑な言葉、概念である、ということなのだろう（p.42）」と述べている。

音楽におけるジェンダー研究の中心は、音楽学の分野である。福中（2012）は、西阪の書評において「英語圏のいわゆる『ニュー・ミュージコロジー』学派に牽引される形で胎動をみたフェミニズム批評に則った音楽研究（それが、より広い立脚点を網羅する、『ジェンダー研究』と交差する音楽学へと広がっていったのであるが）が、結果的にはファルス至上主義的カノンを補強し、あるいは社会的・生物学的ジェンダーにおける『男性性』と『女性性』の二項対立を『克服すべきもの』として画一化してしまった（p.51）」とまとめている。福中（2012）は、「『歴史』から疎外された女性、あるいはステレオタイプ化された表象を通してのみ歴史のなかに生きてきた女性という前提に基づく論考の域」を出ない研究成果に疑問を呈した上で、「ジェンダー批評に則った音楽学」が、「その動機実体も、あるいは新たな研究指標の可能性もよく咀嚼されぬままに、過去の一トレンドとして忘れさられつつある感のある日本の音楽研究」であることを指摘している（p.51）。

音楽教育においても、ジェンダー研究が展開されている。例えば、社会的地位やライフスタイル、一般的な性役割の違い、音楽聴取の場所によってジェンダー差が生まれるというフリスFrithの「青年期男女の音楽の好み（音楽行動）」という研究がある。日本においても、若者とポピュラー音楽の関係について、音楽の好みとジェンダーの視点から論じた研究が存在する。

ジェンダーの視点から学校教育を捉え直す研究として、河野（2013）は「隠れたカリキュラム」の重要性を確認した上で、3つの次元から論じている。「1つめは、その国の教育制度や学校体系などのマクロの次元、2つめは、おもに教室の中で教師と子どもが織りなす日々の相互作用の次元、そして3つめはマクロとミクロをつなぐミドルの次元（p.29）」であり、2は授業観察に基づく研究、3は教科書研究を示している。2では、「同じ授業時間内に男女が異なる経験をしていること」を指摘した上で、「女子の『沈黙』や男子による教室支配の実態とその背景分析」や男女に対する教師の対応の「質的差異」を紹介している（p.30）。3では、教科書で取り上げられる人物の男女比や男女の描かれ方や記述のされ方、教科書作成者の性別構成を分析した教科書研究を紹介している。これらの研究は、「教科書が男女の性別に関するステレオタイプを含んでおり、それが隠れたカリキュラムとして機能し、『女の子らしさ/男の子らしさ』といった性役割を学習させてしまう（p.31）」と批判している。このように、教科書は「ジェンダー・バイアスを内包していることがあり、そのようなメッセージを伝えてしまう（p.31）」と河野（2013）はまとめている。

これらに加え、音楽教育におけるジェンダー研究は、学校音楽経験にジェンダー分化を見出す研究、楽器の好みとジェンダーの研究、セクシュアル・マイノリティの生徒の問題、教員養成とジェンダーに関する研究など、多様な研究が展開されている。

日本音楽教育学会の機関誌『音楽教育実践ジャーナル』において、2013年に特集「音楽教育とジェンダー」が組まれたことは、音楽教育においてジェンダー研究を再考する機会となったが、その難しさを露呈することにもなった。この特集において、小林（2013）は「音楽研究者の代表集団である日本音楽学会の周辺でも、2007年全国大会のシンポジウム主題となった一回の例外を除き、〈ジェンダー〉の検討も充分に阻嚙せぬまま、取り上げるに値しないかのごとく風化・黙過されてきた（p.34）」と述べており、音楽におけるジェンダー研究の難しさについて吐露している。

3．声のジェンダー研究

森山（2016）は、「クィアな人々」を「何らかの意味で非規範的な性を生きる人（p.37）」と定義した上で、

「文字通りの声と比喩としての声を共に検討し、両者がいかなる形でクィアな人々の生存と関連しうるのかを示すこと」を試み、「最終的には、声をその発話者に結びつけるイデオロギーの危うさそのものが、まさにこの連関を解除しクィアな文脈における声を再構築する転覆的な要素となりうる」と述べている（p.38）。

具体的には、声とセクシュアリティの連関についての精査について、「私たちはそこに声とセクシュアリティの連動を見てとるべきではなく、それがある種のイデオロギーや規範の効果であると考えるべきではないだろうか（p.41）」と疑問を呈している。さらに、コステンバウムKostenbaumの説を引用し、「私たちは声とセクシュアリティとアイデンティティの結びつきを一種の神話と捉え、そこに批判的な目を向けなければならない（p.43）」と警告し、「『声』を（政治的な）自己表現を指す比喩として解釈してしまう傾向を再考しなければならない（p.44）」と指摘した上で、西洋古典音楽における歌を検討している。

一方で、デリダDerridaによるルソーの歌に関する議論について、森山（2016）は「歌が『人間の情念』に基づく『叫びや歎き』にルーツを持つものであり、それらを模倣したもの（p.55）」と紹介した上で、「ルソーのテキストにおいては明確に異なるものとして位置づけられる『叫びと歎き』、歌、語られたもの（parole）、書かれたもの（ecriture）は、書かれたもの（ecriture）によって代補されており、実のところはひとつながりの鎖（p.57）」と述べている。したがって、「物理的な声が私たちの『情念』を含むように思えるのは、実際のところは代補の結果（p.57）」と結論付けている。

それでは、「歌の魅力」とは何だろうか。森山（2016）は、「『他者性によって自己の内を満たす』力（p.58）」と規定した上で、次のように説明している。（p.58）

> 歌う行為は、歌や声が美化されてしまう外部性の「混入」のプロセスを、（暗黙のうちにであれ）戦略的に流用するプロセスと考えることができるのではないか。他人の書いた歌詞を、言い換えれば他者の沈殿物を、私たちが楽しんで歌えるという事実は、 歌の魅力なるものが実際のところ何であるのかを例証している。すなわち、それは私たちのセクシュアリティやアイデンティティを反映しているとされる声を通じて自己を晒すことの喜びではなく、むしろ自己と他者の間の距離や溝を縮めたり混乱させたりすることにより、虚構のうちに「自己を晒す」ことの快楽なのではないか。

つまり、「物理的な声（を発すること）の中にすでに他者性は澱のように存在するのであり、歌うこととはまさに主体的に（≒私として）歌うことと他者の言葉を歌うことを一つの歌の中で調停する試み（森山，2016，p.59）」なのである。森山（2016）は、マイヤーズMyers（2011）による「一般に合唱団の活動においては『集合性と個人主義の間のバランスが問題になる（the balance between collectiveness and individualism is at stake）』」という説を踏まえつつ、一例として、ゲイ＆レズビアンパレードとゲイ男性の合唱団を挙げ、「個人のアイデンティティを集団での行為に溶け込ませることは、自己解放につながる生存戦略としてきわめて有効なのである。同様に、ゲイ男性の合唱団においては、この戦略によって個々のゲイ男性は『自己』を解放しつつ音楽の快楽を手に入れることに成功している（p.59）」と述べている。すなわち、「声はすでにジェンダーやセクシュアリティの境界を超え、ある身体を離れ別の身体を満たすクィアな力を潜在的に持っている（森山，2016，p.62）」のである。

このように、森山の論文は、クィアな人々の生存という観点から書かれており、大きな示唆を与えてくれる。

４．教育における声のジェンダー研究

八木ら（2014）は、服部公一（1999）の『子どもの声が低くなる！現代ニッポン音楽事情』によって指摘された「子どもの声が低くなっている」という変化と、「その背景のひとつに女性の声が低くなっていること」をもとに、「声のユニセックス化」と音楽教育に及ぼす影響について言及している。

子どもの低音化現象の要因として、服部は次の点を指摘している。第一に、建築や遊びの質等の生活環境の変化、第二に女性アナウンサーの低音化等のテレビの影響である。

また、服部（1999）は音声学の新美成二による「50年や60年の食生活の変化で、声帯がのびて声が低くなったりはしない。それはどんな声を出したいかという意識の心理的影響であって声帯の変化とは無関係」という説を紹介している（八木ら，2014，p.100）。しかし、声帯の伸長は食生活の変化による体格の変化と関係しているという研究が存在しており、この説には疑問が残るが、心理的影響も声の変化に関係していることは否めないだろう。

以上の内容を踏まえ、八木ら（2014）は実際に男声・女声がどう変化してきたのか、さらに男声・女声の好みがどう変化してきたのか、分析している。その結果、男性の声が「低音重視から高音域へ（p.100）」、女性の声が多様化（低音化）し、「女らしさからの解放へ（p.102）」至っていることが明らかになったとされる。

女性の声の低音化の一因として、70年代以降の「現象としての女性の社会参加（p.102）」、すなわち社会参加やそうした教育の推進による「女性の役割固定や伝統的な女性らしさの否定（p.103）」を挙げていることは興味深いものの、子どもの低音化の心理的影響についても併せて検証が必要であろう。

男声の高音化については、アイドルの存在による「中性化の現象」が一因とされる。90年代以降のファルセット多用により、「その音域はほぼ女声の音域と重なることになって」きたのである（p.104）。「男性らしさ、女性らしさといった二分法の崩壊」が「中性化」「声のユニセックス化」の一因とされ、一方でクラシックの世界においては、当然「ソプラノ、アルト、テノール、バスという区分けは存在しているし、そうした声による混声合唱は変わることなく演奏されている（p.104）」ことについては、今後の研究が待たれる。

５．合唱におけるジェンダー研究

音楽指導の現場では、「音楽指導者はだれしも、その教育現場が学校であれ個人の音楽教室であれ、自身が関わるすべての子どもたちが音楽をする時間を楽しみ、音楽で自己表現する開放感や達成感などを味わってほしいと願って指導している（中島，2013，p.114）」ことが前提であり、筆者も然りである。しかし、セクシュアル・マイノリティの生徒たちは、音楽活動の場面で「息苦しさを感じ、顔をくもらせてきている（中島，2013，p.117）」というのである。

このような現状に対して、中島（2013）は、音楽指導の現場で「人のセクシュアリティの多様性について正しく理解すること（p.114）」を提案している。このセクシュアリティとジェンダーとの関係については、「社会的性差（ジェンダー）は人の性的ありよう（セクシュアリティ）の一部分でしかない」とした上で、「セクシュアリティの多様性を正しく理解することは、無意識のうちに自分自身に刻み込まれているジェンダーバイアスの存在に気づき、解消することにつながっていく」と述べている（p.114）。

中島（2013）は、「40人の学級ではクラスに2人くらいセクシュアル・マイノリティの生徒が存在することになる（p.116）」と述べた上で、いくつかの例を挙げている。引用された例は、2013年１月から２月の期間、中島の「学校の音楽の授業や音楽に関係した場面でセクシュアリティに関して困った経験や嫌な思いをした経験を寄せてほしい」という呼びかけに応じた、大学の公認学生団体や交流会の参加者のものである。

ここで、「身体の性別が女性で性自認が男性ほか」による中学校の合唱コンクールの事例を示す。（p.119）

> 中学校の合唱コンクールで「歌いたくなかったからいつも指揮者に応募していた」。
>
> Ｄさんは授業中、歌唱活動を熱心にしない一見扱いにくい生徒である。普段真面目に取り組んでいない生徒が指揮者になりたいと言い出した時、指導者に「ひょっとして」というセクシュアル・マイノリティへの思いはよぎっていただろうか。小学校高学年の歌唱活動の指導に際しては、すべての指導者が、変声期を迎えているかもしれない男子生徒のことを考慮しつつ指導を考えているはずである。無理なく歌える別パートの作成や歌唱以外で参加できることなどいくつもの選択肢を提案して一緒に音楽活動ができるよう試みることだろう。中学校の合唱コンクールにおいても「今度のコンクールにどのような関わりをしたいか」を尋ねることはできるのではないだろうか。

この事例に対して、中島（2013）は「何名ものトランスジェンダーが経験している『自分の声の高さ（あるいは低さ）への違和感』は思春期以降の音楽教科での配慮が必要な部分（p.119）」と指摘している。また、「性同一性障害の生徒の中には自分の身体の性別による声の高さに不快を感じている子どもも多い」とした上で、「カミングアウトしていない彼らが熱心に歌唱活動をしないことを怠けているように受け取られて注意をされる要因は、指導者にセクシュアル・マイノリティの視点が欠如しているために他ならない」述べている（p.119）。

これに対するアプローチとして、教師による「声質や声域も大切だけれど歌いたいパートを歌っていいよ」という自然な声かけが大切とされる。実際に当事者は、「性別を問わず歌いたいパートを選べるなら歌いたかった（p.119）」と述べていることからも明らかである。

６．変声期におけるジェンダー研究

変声期におけるジェンダーの問題として、笹野（2003）は、「男声」「女声」パートの固定の問題を挙げている。

教科書会社によって、「男声」「女声」パートがあらかじめ性別によって固定されている（低声部が男声）場合と、性別カテゴリーでのパートを記載していない場合に分かれている。これについて笹野（2003）は、「変声期配慮のための『男声』『女声』パートの固定的な記載は、学校音楽文化における男女の性別分化と性別役割を正当化する装置として機能している」ものの、「生徒は指定されたパートを繰り返しうたうことによって、自ら主体的にジェンダーイデオロギーを形成していくことになる」と指摘している（p.184）。筆者らによる変声期研究において、パート分けはあくまで児童・生徒

の「声域」による「声の分類」であり、日本においては「声の質」も考慮される場合が多いという結果が出ている。一方で、笹野の指摘通り、合唱のパートが「性別分化と性別役割を正当化する装置して機能している」現場も未だに多く存在することから、「最初から性別によってパートを固定してしまうことは、生徒に自分の声域にあわせた選択の自由を保障することが難しい」という指摘には大いに賛同する。また、「低声部は『男らしい』声として、高声部は『女らしい』声として、それらはそれぞれの性が担う『声』として規範化される」という課題については、変声期の段階によるパートの分類を実践することで解消できる問題であり、または正しい変声期の理解（変声期の低音化は「男声らしい」ことを求められた結果ではないこと）により回避すべき問題であろう。

おわりに

本研究では、ジェンダー研究の実証的アプローチに対する留意点をまとめた上で、音楽や声に関するジェンダー研究を概観してきた。変声期におけるジェンダー研究は、まず「動機実体」を明らかにし、「新たな研究指標の可能性」を探ることから始めなければならないだろう。変声期は、第二次性徴に伴って声帯が伸長することを原因とした声の変化であることから、音声生理学の視点から低音化が顕著な男子を研究対象とし、変声期における声域や声質の変化を明らかにする研究が多く存在する。筆者らの変声期研究は、一人ひとりの声域の変化を小学校６年生から中学校３年生までの４年間に渡って測定し、声の質の特徴や変化についても考察してきたことから、毎年の調査において「自らの変声期の段階（状態）の正しい理解と見通し」を示すことによって心理的な配慮をしたつもりであった。

本研究で明らかになった声や合唱、変声期におけるジェンダーの課題は、変声期男子に対する在るべき指導や配慮に大きな示唆を与えてくれる。中でも、前述の中島（2013）による「自分の声の高さ（あるいは低さ）への違和感」は、多くの変声期男子が感じているのではないだろうか。セクシュアル・マイノリティの生徒が性自認と異なる「声の高さ（あるいは低さ）への違和感」を持つように、変声期男子は、これまでの児童期の声と異なる「声の高さ（あるいは低さ）への違和感」を持つはずである。変声期男子における「声の高さ（あるいは低さ）への違和感」の実態調査、さらにこの違和感に対してどのように配慮すべきかについては、今後の課題としたい。

引用・参考文献

石井由香理（2010）「医療言説におけるゆらぐジェンダー概念と再帰的自己」『ジェンダー&セクシュアリティ（５）』
井上貴子（1997）「ジェンダーと音楽学—問題点と可能性－」『東洋音楽研究』62号
今田匡彦（2013）「反ジェンダー音楽論 一性は鳴り響かない」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11，no.1
河野銀子（2013）「学校教育におけるジェンダー」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11，no.1
小林緑（2013）「女性作曲家がいつまでも知られない理由 一ジェンダーの根源は女性差別なのか」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11，no.1
佐々木掌子・尾崎幸謙（2007）「ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成」『パーソナリティ研究』第15巻
Stoller, R. J. (1964).“ A contribution to the study of genderidentity. “ *The International Journal of Psychoanalysis*, 45, 220–226.
笹野恵理子（2003）「日本の音楽教科書にはどのような『隠れたメッセージ』が含まれているか：特にジェンダーの視点に着目して」『学校音楽教育研究』７巻
性同一性障害に関する委員会（2006）『性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン（第３版）』
性同一性障害に関する特別委員会（1997）「性同一性障害に関する答申と提言」『精神神経学』99（７）
中島光幸（2013）「ジェンダーとその周りの多様性に自覚的な音楽教育とは一気づいていますか。 20人に１人のセクシュアル・マイノリティの生徒のこと」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11，no.1
浜田恵・伊藤大幸・片桐正敏・上宮愛・中島俊思・高柳伸哉・村山恭朗・明翫光宣・辻井正次（2016）「小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連」『発達心理学研究』27
東優子（2000）「ジェンダー指向をめぐる医療と社会」『健康とジェンダー』明石書店
福中冬子（2012）書評「池田忍，小林緑共編『視覚表象と音楽』（ジェンダー史叢書４）」『音楽学』第58巻１号
森山至貴（2016）「文字通りの声—その両義性のクィアな流用に向けて—」早稲田大学ジェンダー研究所紀要『ジェンダー研究 21』
八木正一・磯田三津子・川村有美（2014）「男声・女声の嗜好に関する歴史的分析—声をめぐるジェンダー的視点と学校音楽教育—」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』13巻
吉光正絵（2007）「ジェンダーと音楽」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』８号
Money, J. （1965）. “*Sex research; New developments*”. New York: Holt, Rinehart and Winston